

海辺の光景

—— 高齢者文学人生論

安岡章太郎 (1920-2013) 「光文社」
『海辺の光景』 (1959) 「講談社」
『流離譚』 (1981) 「新潮社」
『鏡川』 (2000) 「新潮社」
『我等なぜキリスト教徒となりし乎』 井上洋治共著
(1999) 「光文社」

人間が死ぬるときは必ず干潮じゃ。満潮で死ぬることは、めったにありやせん。

安岡章太郎は脊椎カリエスを患い、正岡子規のように三十代の若さで死ぬ作家かと思われたが、意外にも九十二歳まで生きた。死因は老衰。

もう一つ意外だったのは六十六歳でキリスト教に入信し、キリスト教徒として死んだことだ。友人の遠藤周作を代父としてカトリックの洗礼を受けたという。井上洋治との共著『我等なぜキリスト教徒となりし乎』もある。

初期の軟派の不良小説や代表作とされる『海辺の光景』からはキリスト教どころか宗教的要素はまったく感じとれない。

『海辺の光景』は三十九歳のときの作。老耄性痴呆症にかかり、精神病院で死ぬ母の最後をリズムで淡々と描いている。「ふん、とうとう放りこまれることになったか!」「あ痛」「痛いヨウ、痛い……」。

息子は、重症病棟で母がおむつを取り換えてもらったところを見る。「褥瘡(とこずれ)の手当のすむまで、ちよつと待つとつてください」と看護人が言った。こんなに大きな「床ずれ」が出来るのは、心臓が弱っているためだ。心臓の働きが弱って寝床に圧された部分に血がかよわなくなると、その部分から腐れはじめる。

いよいよ呼吸が目に見えて弱りはじめたが、息を吹き返した。医者は病室を出て行くとき、露骨



海辺の光景

—— 高齢者文学人生論

に不機嫌な様子をしていたが、それは自分が病人に対して全く無力だということを知っているためでもあるだろう。患者のひとりが言った。「人間が死ぬるときは必ず干潮じゃ。満潮で死ぬことは、めったにありやせん」。

晩年の安岡章太郎がキリスト教に入信した理由は人の縁だという。第三の新人と称される作家仲間だった遠藤周作との縁、妻や娘との縁、父方、母方の先祖との縁である。

娘の治子は。聖心女学院でミッションスクールの教育を受けた。その娘が成人してから何か信仰をもちたいと、言い出した。家族がみんな一緒にした方がよいと、そういう言い方をして勧めた。母がまず賛成し、父も一人取り残されるわけにはいかず、信仰をもつことになった。

先祖との縁は、『流離譚』や『鏡川』に描かれている。土佐の郷土で、明治維新のときは一族で勤王党に入れ挙げた。ところが、薩長中心の明治維新政府ができる、土佐藩は取り残された。薩長に対抗するためには、土佐藩としては自由民権運動へ行くしかない。民権運動をやるには、どうしてもキリスト教が必要になり、安岡の一族は皆キリスト教徒になったという。

しかし、信仰はあくまでも本人の自由意志だ。安岡章太郎はこころ貧しきものだったと思う。

こころ貧しきものは幸ひなり　　マタイ